

世界にひとつの双葉の学校

—双葉町学校設置基本構想—



令和 6 年 3 月

双葉町教育委員会

はじめに

大切なもの。

双葉町は、あの日を境にコミュニティの崩壊と、多くの可能性を秘めた子どもたちの学びの場が奪われてしまいました。

子どもたちにとっても双葉町にとっても、大切なものが機能できなくなってしまいました。

現在も主のいない双葉町内の学校は、時間が止まったままです。

令和4年8月30日に、特定復興再生拠点区域の避難指示が解除され、9月5日には、双葉町役場新庁舎で業務がスタートしました。そこで、「双葉町の未来につながる町づくりの推進」という町長の方針のもと、令和5年5月に「学校設置検討委員会」が発足しました。双葉郡8町村の中では、地元に戻っての学校再開はラストランナーです。

平成26年4月にいわき市錦町で町立学校を再開し、同年8月に仮設校舎・園舎を建築して子どもたちの学びを保障してきました。同時期に、双葉郡教育復興ビジョンの取り組みの一つとして「ふるさと創造学」という、双葉郡8町村で協力して取り組む教育活動で探究的な学習をベースに、双葉町の伝統文化や歴史、復旧・復興に関わる事について外部団体と連携して体験的な活動を行ってきました。

そして、今、大切にしているものは、震災前からALTとして、双葉町の子どもたちを教え、避難先でも、現在も子どもたちに英語学習を通して寄り添い、非常事態における「人としての行動・想い」を伝えてくれている二人の英国出身のALTに対する感謝とこれからの学校教育に必要な「人としての生き方」「人との絆」をグローバルに捉えて学びの本質の一つとして構築していきたいと考えています。

この度、5回におよぶ学校設置検討委員会の会議、そして多くの専門的領域におけるワークショップ、幅広いアンケート調査を経て、双葉町学校教育基本構想がまとまりました。

これまでの学校設置検討委員はもちろん、関係されたワーキンググループの委員の皆様、基本構想へのご意見を頂戴したすべての皆様に御礼と感謝を申し上げます。

双葉町教育委員会 教育長 館下 明夫

目 次

はじめに

- 1 双葉町学校設置基本構想の背景
- 2 これまでの取り組みと学校づくりの意見要望
- 3 ふるさと創造の学校づくり
- 4 学校づくりのテーマ
- 5 学校づくりの基本方針
- 6 計画予定地
- 7 学校づくりの想定スケジュール
- 8 これからの検討課題

おわりに

- + 未来の双葉町へのメッセージ

1 双葉町学校設置基本構想の背景

(1) 双葉町の概要



1) 地勢と沿革

双葉町は福島県の浜通り地方中央、双葉郡に属す。東に太平洋、西に三ツ森山や十万山など山々が連なる阿武隈高地が広がり、海と山にいだかれ、夏は涼しく、冬は温暖で降雪の少ない地域である。相馬中村藩の南部、標葉郷にあり、昭和26年に新山町と長塚村が合併して標葉町となり、昭和31年に双葉町に改名し、昭和33年に浪江町の一部を編入して今に至る。北に浪江町、南に大熊町があり、両町の中心部まで車で10分程度である。

2) 歴史と文化

縄文時代から集落の痕跡があり、7世紀前半には双葉南小学校敷地内に保存されている清戸迫横穴と呼ばれる古墳が建設されたとみられている。722年に植えられた前田稻荷神社の御神木（前田の大杉）が現存する。

相馬野馬追（標葉郷）、300年続くダルマ市等の歴史が残り、谷筋に集落が形成されている関係から、住戸、田畑、里山が近接した長閑な風景が広がる。また3000人参加する町民体育祭、地域ごとの神楽、町民文化祭や盆踊り等、多くの町民が参加する催しも盛んに開催されていた。

3) まちづくりのこれまでとこれから

農業を主産業とし、旧街道の宿場町や国道6号線沿いに集落が形成された。1970年代以降は原子力発電所が稼働し、首都圏へのエネルギー供給地として、また発電所を中心とした双葉工業団地、文化や自然環境を生かした観光産業など多様性をもち発展した。

駅を背に、太平洋側の国道沿いを中心に発展していた町は、東日本大震災による津波被害と原子力発電所事故を受けて、町の姿が見直され、双葉駅西側に復興公営住宅や再生賃貸住宅が整備されるなど、駅を中心とした姿に変化しつつある。海岸沿いの中野地区に県立の東日本大震災・原子力災害伝承館が整備され、復興産業拠点として企業誘致を行っている。

(2) 東日本大震災と双葉町の教育

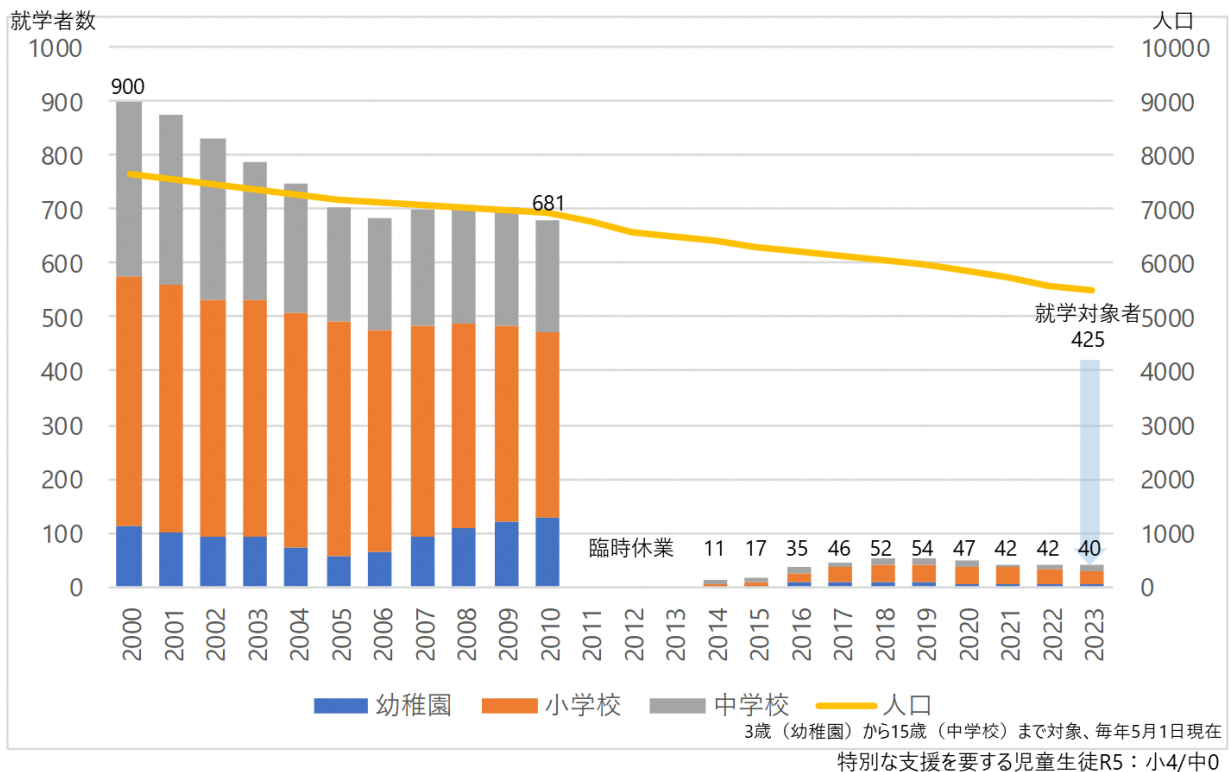
平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故により、すべての町民が町外へ避難し、長期にわたる避難生活は震災から 13 年経過した令和 6 年 3 月現在も継続している。3 年間町立学校が再開できず、避難先の各地の学校に子どもたちは通っていた。平成 26 年 4 月に町立学校を再開し、同年 8 月いわき市錦町に、ふたば幼稚園、双葉北小学校、双葉南小学校、双葉中学校が同居する仮設校舎・園舎が完成した。幼稚園 1 人、小学校 4 人、中学校 6 人からの再開であった。現在も、



写真：旧双葉中学校校舎

避難先は全国各地に分散しており、町立学校に通う児童生徒は限定的である。震災前に幼稚園 130 人、小学校 343 人、中学校 208 人であった就学者数は、現在、合わせて 40 人程度であり、その中には半数程度の区域外就学者も含まれる。避難者を含む就学対象者数は令和 5 年度で 425 人であり、町立学校に通う園児児童生徒数は 1 割に満たない。

令和 4 年 8 月 30 日に特定復興再生拠点区域の避難指示が解除され、9 月 5 日から双葉駅東に整備された新庁舎で業務が開始された。町民の帰還や新たな住民の受入れに向けて、取り組みが始まる中、令和 5 年 6 月 9 日に福島復興再生特別措置法が改正され、中間貯蔵施設区域と特定復興再生拠点区域を除く帰還困難区域においても、「2020 年代をかけて帰還意向のある住民が帰還できるよう取り組みを進める」という政府方針が示されたことから、居住人口の回復に向け、前進することとなった。



図表：町立学校の園児児童生徒数の推移

(3) 学校に関わる歴史的な背景

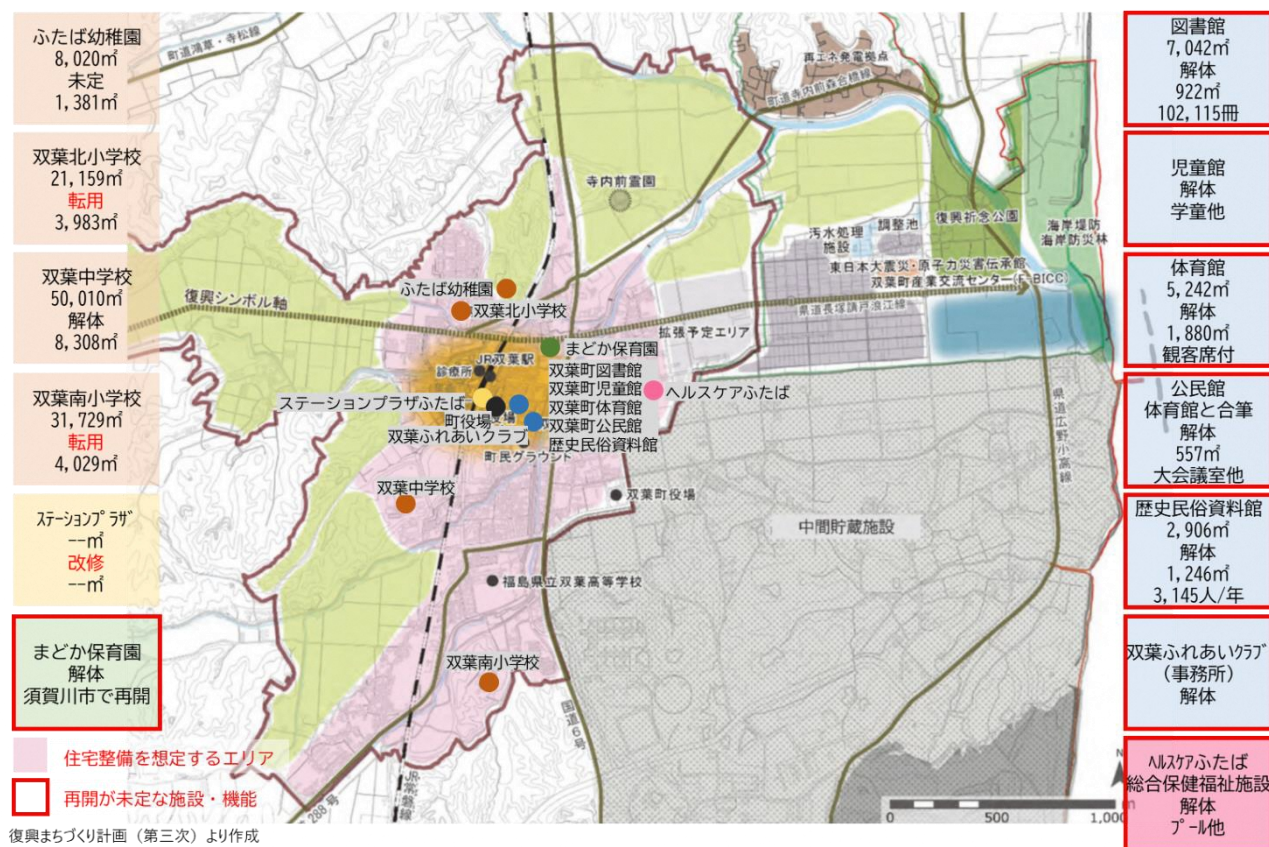
大正 12 年（1923 年）に旧制福島県立双葉中学校（現双葉高校、現在は休校中）が設置され、双葉町は郡の学びの中心であった。そのため「文教の地」と呼ばれ、それは町民の誇りであった。昭和 40 年から 50 年代に小中学校施設が相次いで整備され、昭和 55 年（1980 年）には中学校に 50m プールが整備されている。昭和 27 年に標葉町保育園（現在のまどか保育園）が設立され、昭和 47 年に町立幼稚園を設置した。

町立学校 3 校は全て高台に整備され、山地を切り崩すなどして敷地造成されている。津波や水害等の歴史的な経緯もあり、学校を安全な場所にするという思いが感じられる。

	2010 年の児童数等	主な建物整備時期	面積（校舎/屋体）
ふたば幼稚園	130 人	昭和 49 年	1,363 m ²
双葉南小学校	192 人	昭和 44 年	3,211 m ² /643 m ²
双葉北小学校	151 人	昭和 47 年	2,957 m ² /818 m ²
双葉中学校	208 人	昭和 53 年	4,426 m ² /2,507 m ²

図表：町立学校の校舎等

社会教育施設は双葉駅東側エリアに図書館、児童館、体育館、公民館、歴史民俗資料館が設置され、その他に総合保健福祉施設ヘルスケアふたば、青年婦人会館せんだん温泉なども整備されていた。現時点では、コミュニティーセンターの改修の方針が示されており、他の公共施設についても検討が進められている。



図表：学校及び公共施設の位置

(4) 現在の双葉の教育

1) 仮設校舎での学びの環境

いわき市内に2階建の仮設校舎が建てられ、小学校1年生から4年生までが1階、5年生から中学校3年生までが2階の教室を使用しており、幼稚園は別棟にある。体育館はあるが、校庭が確保できず、外遊びは校舎まわりで行われている。プールは隣接する公立小学校のプールを借り、運動会は仮設校舎の体育館で行っている。

幼稚園、小学校、中学校間で交流学習も実施されているが、活動領域は限定され、2階で活動する小学生や中学生は1階の図書室にあまり行かない、という声も聞かれる。

2) スクールバス

子どもたちは全員いわき市内に居住し、全員がスクールバスで登園・登校している。下校を2便で5路線運行し、通学時間が1時間ほどかかる子どももいる。スクールバスの制約もあって放課後の時間がとりにくく、学童保育は実施していない。

3) 放課後活動

放課後は学習会と中学生の部活動が行われている。一便が15時30分に出発するため、5時間授業の場合には1時間程度である。中学生は部活動と学習会を同時に行うことができないため、学習会は週1回と少ない。部活動はバドミントン部のみであり、行わない生徒もいる。

4) ふるさと創造学

双葉郡8町村で協力して取り組む教育活動。総合的な学習の時間を中心に、テーマを設定し、情報を集め、整理・分析して考え、まとめて表現するという、一連の探究的な学習プロセスを学ぶ。地域の伝統文化、歴史、復興等、地域に関わる様々な事柄を題材とし、地域が学校外の団体と連携して体験的な活動を行う。郡内の学校が共に行うことを活かしてサミットとして、発表・共有する場を設けている。

5) ALTと幼稚園からの英語教育

2008年より英国出身のALT2人が継続して双葉町で英語教育を行っている。2人は震災にあっても帰国せず、避難先の加須市でも教え、2013年からは仮設校舎で教えている。幼稚園と同居することになり、幼稚園段階から英語に親しむ活動を行い、縁を活かして英国との友好都市や交流学習の実現に大きく寄与している。

6) 学校を支える組織

PTA、学校評議員、保護者会等の組織、活動は震災後実施されていない。地域学校協働本部は双葉郡全体として取り組んでいる。



写真：仮設校舎（いわき市錦町）

2 これまでの取り組みと学校づくりの意見要望

(1) これまでの取り組み

令和5年5月に設置した学校設置検討委員会の第一回会合以降、10か月間に学校設置検討委員会を5回、ワーキンググループ（行政部会と教育部会に分けて実施）を計7回実施した。その他、ヒアリング、アンケート、ワークショップを行い、意見要望、想いを集める取り組みを行ってきている。

令和5年	5月29日	第一回学校設置検討委員会
	9月05日	第二回学校設置検討委員会
	11月02日	第一回ワーキンググループ（教育部会）
	11月20日	第二回ワーキンググループ（行政部会）
	11月29日	第三回学校設置検討委員会
	12月26日	第三回ワーキンググループ（行政部会）
令和6年	1月11日	第四回ワーキンググループ（教育部会）
	1月17日	第五回ワーキンググループ（行政部会）
	1月30日	第四回学校設置検討委員会
	2月15日	教育委員会会議
	2月16日	第六回ワーキンググループ（行政部会）
	2月22日	第七回ワーキンググループ（教育部会）
	3月01日	第五回学校設置検討委員会
	3月26日	総合教育会議

令和5年9月25日 町各課ヒアリング

令和5年12月20日～令和6年1月19日 アンケート実施

令和5年8月21日～23日 東京大学サマースクール（夢の学校づくりワークショップ1°）

令和5年12月27日～28日 東京大学ウィンタースクール（夢の学校づくりワークショップ2°）



(2) 学校設置検討委員会における議論

1) 目指す学校像・コンセプト

○目指す教育・目指す学校像

- ・町の教育振興基本計画に掲げた大きな目標「子供たちが夢と希望を持って目標に向かって努力する幼小中の一貫性のある学校教育を実現する」、「誰もが学びたい時に学ぶことができる生涯学習環境を実現する」、「町の復興を担い、社会や地域に貢献できる人材育成」を中心に据える
- ・0歳から15歳の学びの場、0歳から100歳まで利用できる学校という方向性はよい
- ・学びと育ちの連続性はとても大切だと思う
- ・幼稚園と小学校、小学校と中学校等の複数の免許を持つ先生もいるので、少人数を活かして系統立てて学ぶ、一緒に学ぶ等の取り組みができると、強みになるのではないかと
- ・保育・幼稚園教育、義務教育について、双葉町、この学校ならではの魅力や特色が必要
- ・今の学校で行っている取り組みを継続できるとよい
- ・小学校段階の専科制、英語教育に力を入れる等のカリキュラムの特色を活かすためにも、教員配置や教育課程の柔軟性がある義務教育学校がよいのではないかと
- ・F-REIは理系人材の育成という側面もあるので、その点で連携できるとよい
- ・教育にも、施設にも、双葉町ならではのという側面がもう少し強く出てくるとよい
- ・従来の学校という枠ではとらえきれない新たな教育施設になってきているので、その点をわかりやすく整理したい
- ・0歳から15歳、地域コミュニティ、避難所、SDGsや新しい技術・産業などのいくつかの太い軸に対して、関連する様々な要素が紐づくようになるとよい
- ・学校を取り巻く周辺的な特色はもちろんとし、教育の部分をより明確にしていかなないと通わせたいと思える学校にはならないのではないかと

○国際性・グローバル

- ・今のALTを含めた英語教育や国際理解教育、英国との短期留学や学びの可能性等から、グローバルはコンセプトのひとつになるのではないかと
- ・F-REIに外国人の技術者・研究者が所属することになり、その家族のための教育環境を整備するという中で、この学校に期待されることもあるのではないかと

○ダイバシティ・インクルージョン

- ・外国人の児童生徒を受け入れるということに加え、もう少し広い視点でダイバシティやインクルージョンの観点で整理したい
- ・様々な特性、不登校傾向の子どもも一定数いるため、インクルーシブ教育は重要な視点

○子育て

- ・保育所機能がなくなっているため、0歳から預けることができる保育所機能は必要
- ・地域コミュニティを作り直す上でも、子育て支援、家庭教育の支援の役割は重要になる
- ・学童保育を作れるのであれば、預かるというだけではなく、双葉町ならではの特色があることで、双葉町を選びやすくなることを考えてほしい
- ・核家族や共働き世帯が多くなる可能性が高いため、高齢者との交流も考えたい

○地域コミュニティ・共創・社会教育

- ・まちづくりと学校づくりは一体的に考えたい

- ・地域コミュニティが失われているので、近所の友達、保護者同士、地域の声を感じられるものにしていく必要がある
- ・学校に地域の方がくるというイメージから一步進んで、子どもたちが飲食店で食を学ぶ、町の中心にある図書館で学ぶ、それらが学校にあるというイメージ
- ・目的を持って行く場所だけでなく、図書館のようにいけば誰かがいるかも、という形で利用できる場所が欲しい
- ・機能が集積された場所ではなく、行きたくなる場所、行きたくなる活動が行われている場所であってほしい
- ・すぐに整備ができない社会教育機能を吸収しながら、学校に一定の役割を持たせることは重要
- ・社会教育の機能が整備できないので、学校の施設を社会教育で使うという発想ではなく、みんなが利用できる図書館を整備して学校も使うという形にできるとより教育効果が高まる
- ・学校以外の役割の部分の負担を教員が担うことは避ける必要があるので、セキュリティや管理の方法等はさらに考える必要がある

○安全・安心

- ・学校は地域の拠り所で、自分の子どもを預けながら同じ施設の中で働ける、安心して子どもを預けておけるという心理的な安心が確保できる場所が欲しい

○施設整備・整備する機能

- ・学校以外の機能も持つ複合型の施設がよい
- ・保育所と幼稚園を一体とした認定こども園、小学校と中学校が一体となった義務教育学校等を前提に考えたい
- ・復興していく途上であることを考えると、まちなかに分散して施設ができていくよりも、教育・保育に関わる施設、地域コミュニティの形成に資するものは集約的に、コンパクトにできるとよい

○課題と方向性

- ・人が戻るのが（ニーズ）先か、学校が先かという意見はあるが、この学校があるから帰還する、移住するという方向で考えてほしい
- ・あれもこれもと色々つけすぎるよりは、双葉町が目指すコンセプトを明確にして、そのために必要な機能を整備するという方向になるとよい
- ・子どもたちのための学校であると同時に、町民みんなのための学校、子どもや地域の方の声を集めた学校を目指したい
- ・これまでの学校とこれからの学校は変わってきている部分があるので、その点を反映できるとよい

2) 計画敷地

- ・町の中心にあって、通学・通園しやすい、先生たちが通いやすい、地域の方々誰でも来やすい立地である必要がある
- ・双葉中学校跡地は敷地の面積が十分あること、防災面、もともと中学校でなじみがあることなどは利点ではあるが、駅から少し離れ、坂道であり、周囲が鬱蒼とした山であるので、行きやすさ、安全面等での心配があり、その点を解消していくように敷地内だけ

ではない周辺の環境整備も進めてほしい

- ・双葉中学校跡地は、東日本大震災の際に部分的に地すべりするなど、課題もあるようなので、今後ボーリング調査等を行い、安全性を確認した上で、適切な対応をしてほしい

3) 検討のプロセスとスケジュール

- ・帰還する人の数、子どもたちの意見、町民や移住を考えている人のニーズ、町内に立地する企業の要望等、アンケートやヒアリングなどを通じて把握するように努めてほしい
- ・議論に参加できない町民でも、検討の様子がある程度わかり、知らない間に学校ができたという形にならないようにしてほしい
- ・アンケートは一回だけでなく、今後のプロセスの中で複数回実施し、町が考えていることを伝えること、段階に応じた意見要望を把握できるように考えてほしい
- ・双葉町で学校を再開する時期の見通しを早めに明確にしたい
- ・仮設校舎があるいわき市の学校に通わせるかどうか、双葉町へ転居するタイミング等、各家庭の判断がしやすいように情報を公開してほしい

4) 教育部会における議論

○未来に向けた「面白い教育」について

①特色あるカリキュラム

- ・公営塾
- ・習熟度別クラス
- ・高校戻らないか？
- ・子どもが学びを選ぶことができる
- ・乗り入れ、小⇄中（ここはできる）、幼⇄小（ここもできないか）
- ・キャリア教育 職場体験よりリアルな
- ・地域の方（ゲストティーチャー）の活用
- ・様々な人材の活用（行事等）
- ・商工業を学ぶ
- ・教科の新設。「義務教育学級」のメリット
- ・「ならでは」の教育の創出
 - ・だるま？
 - ・イギリス？
 - ・F-REI？
- ・組織（相互）効力感のある集団づくり（子どもも教員も）

②防災

- ・防災施設（何かあった時には）→ここ等
- ・避難に限らず教室をホテル化

- ・収納力（備蓄）
- ・双葉町にしかできない学び（震災学習）→伝える（復興に向けて）
- ・体験活動の充実（防災も含めて）
- ・双葉としての強みとして震災教育に力を入れるのも一つの方法ではないか。
 - ・実際に体験した人がいる（話を聞ける）
 - ・設備などもこれからつくる（高台のメット、地下シェルター）（電気、水などの貯蓄）
- ・防災教育。風化を防ぐ

③スリム化

- ・子どもの荷物を減らす
- ・端末1つですべてを行う
- ・オール電子書籍の図書館
- ・近未来の学校ことも園
- ・ミニマリスト最小限の設備、最大限の効果
- ・ランニングコストの削減
- ・広域での設備共有

④異年齢集回

- ・異年齢での体験
- ・幼小中との交流は続けていければ
- ・0～15才の共同学習体験

⑤保育

- ・預かり保育、学童的役割も担う
- ・コワーキングスペース

⑥体育施設

- ・地域の方→部活（クラブ）指導の充実
- ・体育施設の充実

○枠外

- ・子どもが主語である
- ・誰にとつての「面白い」？
- ・探究的な学び ⇄ 集団
- ・地区の人材を活用した双葉の伝統芸能の継承
- ・街の行事に積極的に参加する、計画していく
- ・近くの施設の活用。ロボットテストフィールド等ドローン等の技術をとり入れが総合学習
- ・学校と他の施設との友好（老人ホームなど）

①アニメゲーム イラストetc.

- ・ゲーム、イラスト、アニメなど世界に通じる人材の育成→民間の力を借りる
- ・アニメ（マンガ）に取り組む活動があり、それらを掲示できるスペースのある校舎
- ・ゲームクリエイターになりたい子どもがその制作に取り組めるような教育

②学校連携

- ・子ども先生
- ・子どもたちが先生となり授業
- ・幼・小・中の連携強化
 - ・垣根のない交流
 - ・先生同士交換（参観だけでなく）
- ・家庭地域への働きかけ
 - ・行事への参加（例：七夕、クリスマス、もちつき、豆まき など）

③ICT、英語

- ・ICT活用 全国各地、海外の学校と交流→訪問
- ・ALT人材の活用 英語教育に特化→国際交流へ

④働き方

- ・先生たちのゆとり
 - ・しっかりとした教員住宅
- ・放課後の取り組み
- ・働き方改革、教員の負担減
 - ・分業
 - ・地域の方活用
 - ・講師をよぶ

⑤発信・PR

- ・メディア活用
 - ・YouTube発信
 - ・インスタ・TV出演
- ・ONE福島と共同して動画をつくっている（幼）
- ・行政
 - ・まちづくりに参加・PR活動
 - ・子ども議会

⑥施設

- ・豊かな環境
 - ・防災センターとしての役割
 - ・地下シェルター・屋上ヘリポート
- ・学校周辺にランニングコースやサイクリングコース

- ・双葉町図書館、歴史資料館の財産を生かした学校づくり
- ・学校内にイベントスペース（客席付）があるとよい
- ・地域との交流、学校行事etc.で使える
- ・地域の方と触れ合うスペースのある校舎
- ・移住者を増やすために創作活動の場の提供
- ・子どもたちが自由に見たり参加できる環境

⑦伝統芸能

- ・伝承芸能
 - ・子どもせんだん太鼓
 - ・大人と一緒につくりあげる
- ・せんだん太鼓（伝統芸能の継承）
 - ・教育課程に明確に位置付ける→メディア出演
- ・双葉町の伝統芸能が引き継がれる教育及びそのスペースのある校舎

○枠外

- ・企業との連携、企業のPR
- ・デュアルスクールや教育留学の制度
- ・双葉町単体を超えてまわりの町村を含めて取り組む
- ・就学援助や教材費・給食費などの援助、家庭の負担軽減

○育てたい子ども像とそのための教育環境

育てたい子ども像

○共感性、思いやり

- ・人の喜びを自分のことのように喜べる
- ・素直
- ・困っている人に手を差しのべられる
- ・相手の立場になって考えることのできる
- ・親、友達を大切にできる
- ・人の気持ちを考えることができる
- ・相手の意見を聞ける
- ・相手の立場になって考えられる
- ・命を大切にできる
- ・ふるさと双葉町を大切に、地域とともに生きる
- ・道徳性、規範意識のある

○表現力、コミュニケーション力

- ・SOSを言える
- ・分かりません、困っていると言える
- ・自分の考えを語れる表現できる
- ・表現力が豊かな
- ・協力し合える
- ・社会性のある

○チャレンジ精神、好奇心、主体性、自立心

- ・のびのび感がある
- ・挑戦する気持ちを持つことができる
- ・興味を発見できる
- ・「〇〇したい」がある
- ・「自分でやってみる」という意欲のある
- ・どんなことにも興味を持つ
- ・失敗を恐れず挑戦する
- ・目標に向かって頑張ることができる
- ・自分の夢をもっている
- ・将来の目標をしっかりと持っている
- ・自分のことは自分でできる

○自己肯定感、自信

- ・自己肯定感をもっている
- ・自己実現できる

○自主性、課題解決力

- ・課題解決するためのプロセスを自分で組み立て解決することができる
- ・進んで学習に取り組める
- ・最後まであきらめない
- ・柔軟な考え方ができる
- ・粘り強い

育てる教育・環境

- ・対人関係の中で学ぶ
- ・他地域、他県、他国の子どもとオンラインの交流
- ・子育てサロンや親子で集まれる場所
- ・放課後や休日に地域の方が活用できる施設
- ・放課後、学童、児童館
- ・居残り保育に中学生が放課後に参加（職場体験含め）
- ・英国の異文化に触れるなどしながら国際的な教育
- ・0歳から15歳まで仲良く協力して学校生活が送れる

- ・知的好奇心を育てる
- ・自然環境（森、川など）が感じられる
- ・地域企業との連携、体験施設
- ・eスポーツにも対応した最新のコンピュータ等の導入
- ・特設eスポーツ部を中学校の部活動に位置づける
- ・子どもの想いに寄り添う環境
- ・やりたいと思ったことが即時に実現できる環境

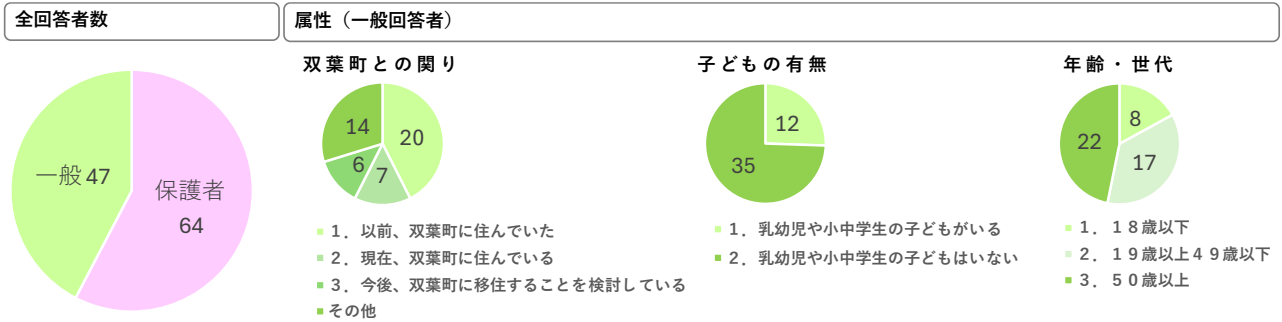
- ・授業で高める自己肯定感、自己有用感
- ・スモールステップで達成感を味わう

- ・先生の専門性を最大化できる環境
- ・教員の休憩時間の確保
- ・施設管理の在り方
- ・避難所として使う間仕切りやダンボールベッドの備蓄

(3) アンケート

1) アンケートの概要

双葉町に住民票があり小中学校に通う子どもがいる 289 世帯及び双葉町に関心がある方を対象にしたアンケート調査を令和 5 年 12 月 20 日あらかし令和 6 年 1 月 19 日まで実施し、111 名（内保護者 64 名）から回答があった。



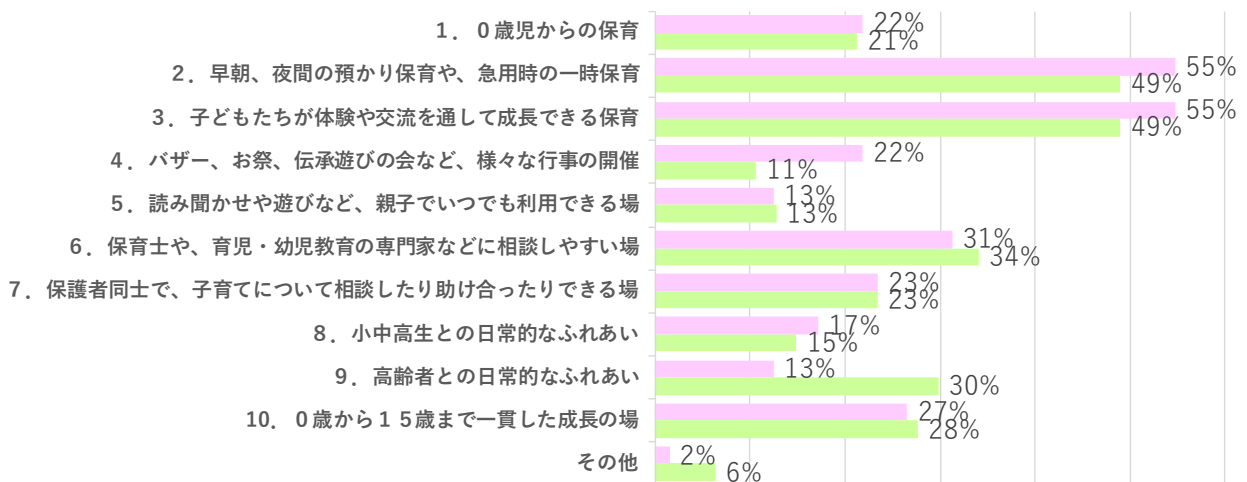
2) アンケート結果の概要

設問 1 から 4 は選択肢から 3 つまで選び、その理由と意見を自由記述で求めた。

グラフは上段（ピンク）が保護者、下段（グリーン）が一般の回答割合を示す。

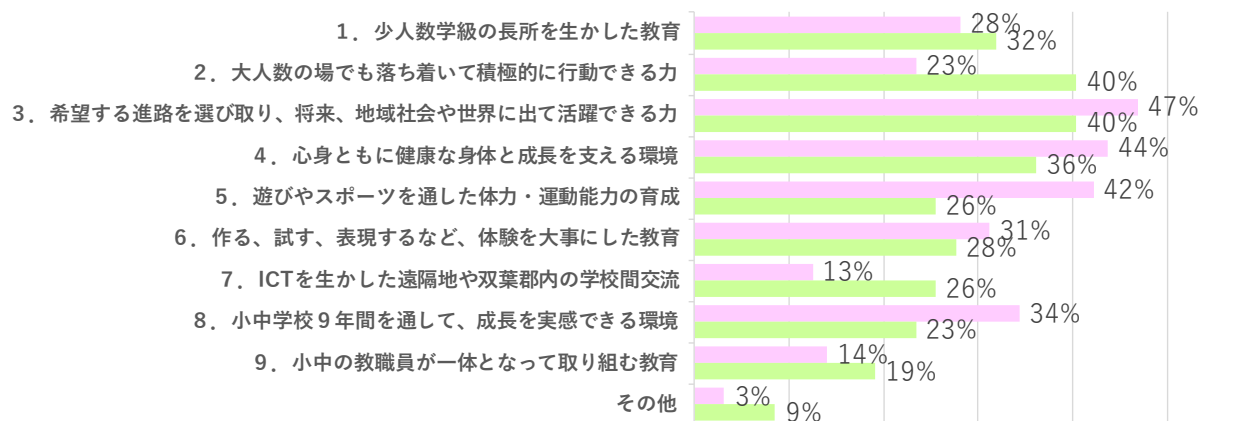
設問 1 「乳幼児の保育・教育、子育て支援について」

約半数が「預かり保育や一時保育」と「体験や交流を通して成長できる保育環境」を選択しており、次いで 3 割程度が「幼児教育の専門家等に相談しやすい場」を選択している。預かり保育は共働き世帯を中心にニーズが高いと言える。また子どもの数が少ないことをふまえて交流や体験の機会を求める意見も挙がっている。



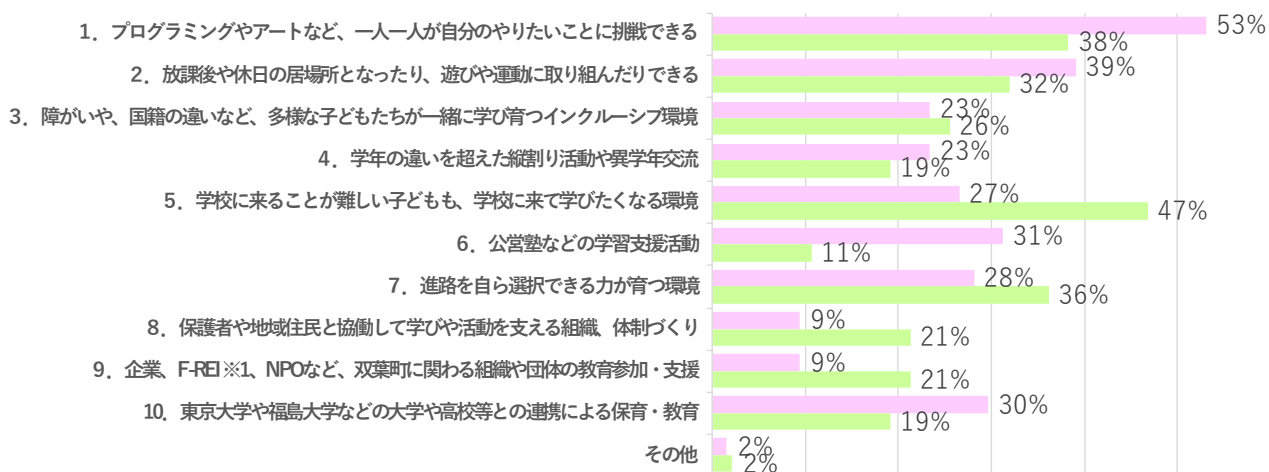
設問2 「小中学校の教育のあり方とその環境として新しい学校づくりについて」

「将来、地域社会や世界で活躍できる力」や「心身共に健康な身体」を選択する人が総じて多く、また保護者については「体力・運動能力の育成」を選択する人が多かった。外の遊び場やスポーツに取り組める環境が求められている。



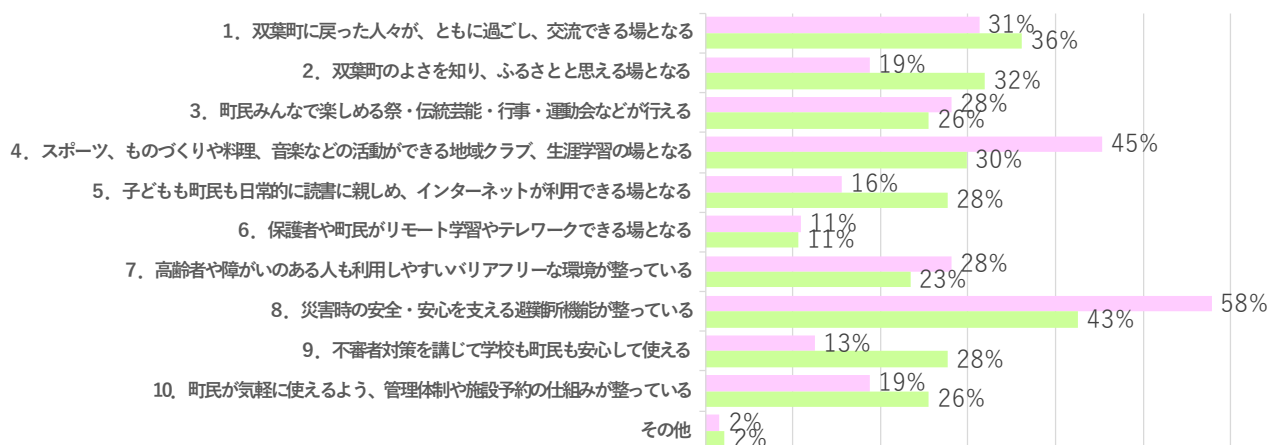
設問3 「新しい学校づくりの特色ある保育・教育の取り組みや内容について」

「一人一人が自分のやりたいことに挑戦できる環境」を選択する人が多く、特に保護者は半数以上が選択している。また「学校に来ることが難しい子どもも学校に来て学びたくなる環境」や「放課後や休日の居場所となり遊びや運動に取り組める」を選択する人も多かった。不登校が増えている社会の状況から、教室じゃなくても学べる場所や居場所を求める意見が挙がっている。



設問4「双葉町のコミュニティを再興する中心として学校づくりに期待するもの」

半数以上が「災害時の安全安心を支える避難所機能」を選択している。また「スポーツなどの活動ができる地域クラブ、生涯学習の場」を選択する人も多かった。「双葉町に戻った人々が交流できる場」も3割を超える人が選択している。安全を確保しつつ、町民が誰でも利用できる施設、集える施設が求められている。



設問5「新しい学校づくりを行う候補としての旧双葉中学校敷地について」

自由記述で意見を求めた。なじみの場所なので良い、高台なので避難所としても良いという意見がある一方で、坂道対策を求める意見や駅前などの町の中心が良いという意見も挙がった。また安全に通える環境整備やスクールバスの運行を求める意見も挙がっている。

設問6「新しい学校づくり全般について」

自由記述で意見を求めた。双葉の良さを伝えられる環境、失敗を繰り返しながら学ぶ教育、学びたいことを一生懸命学べる環境、安心してのびのびと過ごせる環境、笑顔で毎日通いたいと思える学校など、さまざまな意見が寄せられた。また児童福祉や高齢者福祉の視点や、まちづくりや復興の中心として学校の役割を求める意見も挙がっている。そして学校づくりに町民が参加する機会も求められている。

(4) 夢の学校づくりワークショップ（子どもワークショップ、東京大学）

令和5年度中に2回にわたり、仮設校舎で学ぶ小中学生を対象に、「夢の学校づくり」ワークショップを、東京大学浜通りプロジェクト（主催：大塚類・東京大学准教授）により実施した。

夏は、子どもたちと大学生が初対面であるため、子どもがペアを組んだ大学生に自分のお気に入りの場所や苦手な場所を紹介する学校探検を実施し、親睦を深めながらその場所について表現する作品を作った。

冬は、夏に作成した作品をともに、理想の学校空間や場所を考え、小学生はそれぞれの個人作品として、中学生はグループ作品として制作した。作品には人型モデルを貼付し、自分がその空間にいるイメージを膨らませた。完成後は共有会を開き、他の子どもの作品に人型モデルや付箋紙（作品への感想や質問を記入）を貼付し、お互いの作品を味わった。

※以下はワークショップレポート（東京大学浜通りプロジェクト作成）の一部

2023/8/21-8/22

双葉北・南小学校／双葉中学校児童生徒向けワークショップ「学校を知ろう！」 ワークショップレポート

1. 参加人数 | 小学生：11名 中学生：11名
大学生・大学院生：32名
2. 目的 | 理想の学校ワークショップの前段階として、現在の学校に対する児童生徒の具体的なイメージを深める。
3. 内容 | 1日目：学校探検
→児童生徒と大学生がペアを組み、児童生徒のお気に入りの場所、苦手な場所（むむむ…と表記）を児童生徒が大学生に紹介する。探検マップにお気に入りの場所とむむむ…の場所のシールを貼る。
2日目：作品制作
→1日目の学校探検で選んだ場所について表現する作品づくり。



△当日使用した探検マップ



双葉南・北小学校／双葉中学校児童生徒向けワークショップ「夢の学校づくり」
ワークショップレポート

1. 目的 夏のWSで深めたお気に入りの学校の空間や場所をもとに、空間や場所の具体的なイメージを持ち、理想の空間や場所を描く。

2. 参加人数 小学生：13名 中学生：8名
大学生・大学院生：26名



『人型モデル』とは

もう1人の自分が児童生徒の作った空間・場所へ入り、何をしているのかを想像するために使用する。

3. 内容

1日目 理想の空間や場所を描く
 ①大学生の卒アル写真を見ながら、空間や場所へのイメージを深める。
 ②理想の空間や場所を画用紙に自由に描きだし、各空間やテーマごとにカラーージュする。
 ③カラーージュに人型モデルを加え、自分がそこで何をしたいか、具体的にイメージする。

2日目 共有会
 小学生と中学生に分かれ、他の人の考えた空間で自分は何を感じ、どんなことをしたいか人型モデルと一言コメントを加える。



中学1年生

中学生 大学生 11

テーマ：毎日行きたい場所



- | | | | |
|------------------|------------------|-----------|-----------|
| みんなの作品見て感動している | 上手だな一付箋でコメントしよう！ | みんなが通る場所 | にぎわっている場所 |
| 学校の人に見られるのは恥ずかしい | 付箋置き | スタバの新作を飲む | 湾岸やりてえ |

担当大学生からコメント 中1の教室にある、担任の先生が作ってくれた生徒の絵の展示スペースを共用廊下にも作りたい！という思いからこの作品ができています。双葉らしさを感じる空間です。

担当大学生からコメント 自然を大切にしたいというのを常に考えて川や木などを配置していた。一方スタバなど都会的なものも欲しかった。空間が中庭であることも特徴的です。

テーマ：制作部屋



- 学校のものみんなで修理
- 音楽はリクエストもできる
- 安全安心のサポート先生がいる！
- 便利！！
- バラを折ろう！
- 集中できる音楽
- 最先端の機材でワクワク
- 心地よいここ

担当大学生から
コメント

あるものを上から俯瞰的に描くのではなく、実際にその空間で生徒が楽しんでいる様子を作者のセンス溢れる表現力で切り取った絵を並べることで、この場所の楽しさをいきいきと描き出しました！

16

共有会

小学生・中学生ごとに分かれて、人型モデルでそれぞれの作品に入ってコメントしています。



3 ふるさと創造の学校づくり

双葉町の学校づくりとは、震災で一旦失われたふるさとを新たに創造するものである。0歳から100歳までが集い、学び、成長する場となる、これまでの学校を超えた「学校」を創造することである。

この「学校」は、保育所、幼稚園、小学校、中学校が一体となり、学童保育や部活動等は放課後や休日の豊かな育ちの場となる。また、人生100年時代における、生涯にわたる学びの場となり、海外の人との交流を通して視野が世界に広がる。町はこの「学校」とともに復興し、この「学校」は新たなふるさと創造のシンボル、町の中心となる。

(1) 目指す学び

双葉町が目指す学びは、大きく次の「共育」「地域」「世界」「復興」にまとめられる。

「共育」は子どもたちと人々の多様な学びを生み出す。

「地域」は新しいコミュニティや地域を支える力を育む。

「世界」はグローバルな視点から考えて活躍する力を養う。

「復興」は震災を乗り越えて未来の町の姿を考え続ける態度と行動力を身に付ける。

これらは、持続可能で「安全・安心」な学びを基盤とするものである。

「双葉と世界がつながる学び」

共育

- Sense of Wonder（好奇心）を磨き、様々なことにチャレンジし続ける力を育む学び
- 違いを認め合い、協働しながら、課題を見出し追求する力を育てる探究的な学び
- 豊かな実体験とICTの活用により、リアルとバーチャルを融合した未来の学び

地域

- 町全体を学びの場とし、地域や企業等との交流を通し、町のよさ、力を感じ取る学び
- 帰還者、移住者、新たに町で学ぶ人々と活動し、ふるさとの未来を創造する学び
- 町や地区の歴史、伝統芸能、産業を知り、継承し、新たな文化を生み出す学び

世界

- 英語教育と国際理解教育を基盤とするグローバルな学び
- 観光や学習に世界から町を訪れる人々とのふれあいを生かし、世界にはばたく学び
- F-REIで働く外国人やその家族、留学生との交流を通じた双葉でしかできない学び

復興

- 町の素晴らしさを知り、豊かな交わりを通して復興の担い手となる学び
- 災害の特性を知って行動できる力、生命や財産を守る知恵を育てる学び
- 災害、原子力、環境等、持続可能性について、双葉町ならではの深い学び

安全・安心

防災教育 安全教育 防犯教育

(2) 目指す学校

双葉町の学校はふるさと創造の中心である。それ自体が町の復興、未来の町のシンボルとなる。それは、「4つの学校」から成る。1つ目が「わたしの学校」。子どもたち一人ひとりが、新しいことを発見し、わくわくしながら学び、チャレンジし、自分らしさを表現できる場、学びや行動に誘う環境を備えた場。豊かな時間を過ごし、一人でもゆっくりできる居心地のよい場。それが「わたしの学校」である。2つ目は「みんなの学校」。年齢、性、国籍、障害の有無等に関わらず、子どもたちも地域の人々も一緒に過ごし、認め合い、活動できる学校である。3つ目は、外国人を含め様々な人との交流を通して、視野を広げて世界と出会える「つながる学校」。そして4つ目が、災害や犯罪・事故から子どもたちや地域の安全を守り、教育や社会の変化を乗り越える柔軟性を持ち、子どもたちの成長を地域全体で見守り続けることのできる「そなえる学校」である。この4つの学校を一つに結実させることが新しい学校づくりが目指すものとなる。

わたしの学校

- 今日ずっといたい、明日また来たい自分の居場所と思える学校
- 学習、運動、活動、その他興味のあることが見つきり、好きなだけ取り組める学校
- この学校が自慢だ、あの学校で学びたいと思えるプライド・スクール

みんなの学校

- 明日またみんなに会える幸せが感じられる学校
- 多様な教育的ニーズのある子どもを、一人も取り残さないインクルーシブ・スクール
- 地域ぐるみで子どもたちの学びと成長を支えるコミュニティ・スクール

ふるさと創造の学校づくり 復興のシンボルとなる学校

つながる学校

- 学校中のどこでも誰とでも学べ、交流できる学校
- DXにより時間や距離の制約を超えて個と協働の学びを実現する学校
- 学校を飛び出し、社会や世界へ学びが広がるグローバル・スクール

そなえる学校

- 子どもたち、地域の安全・安心を支える、災害に強いレジリエント・スクール
- 帰還や移住等による人口や子どもの数の増減、教育の変化に柔軟に対応できる学校
- セキュリティが確保され、いつでも自由に利用できるセーフ・スクール

4 学校づくりのテーマ

(1) 新しい学びへのチャレンジ

避難先や別の土地で生まれて、新たに双葉町で共に暮らし、学ぶことになる子どもたち。また、F-REI や福島イノベーション・コースト構想に関連して、日本全国、世界中から集まる技術者や研究者とその家族。少人数ながらも一人ひとり背景や状況が異なる人々が一緒に活動することになる学校において、個の学びと、協働の学びの実現を目指す。

ALT とともに取り組んできた外国語教育や国際理解教育、双葉郡全体で取り組むふるさと創造学等の探究的な学び、標葉せんだん太鼓等の地域と協働した取り組み、少人数を活かした保育園・幼稚園・小学校・中学校が連携した活動と放課後の学習会等、これまでの取り組みを継続発展させ、双葉町独自の新たな取り組みを創り出す学校を目指す。この学校で学びたい、学ばせたいと思い、移住、帰還を促進する学びを実現する。

保育園、幼稚園、小学校、中学校、大人（地域社会）といった様々な人と組織が、学校時間、放課後、休日という、曜日や時間帯に応じた多様な集まりの中で関わり合いながら、新しい取り組みが生まれるようにする。

<具体例>新しい時代の学びの必要とその例

- ・少人数だからできる教育、少人数でも大勢の人と交流したり、一緒に活動したりできる取り組み
- ・中学生の英国訪問の継続と、その取り組みに関連した英語教育（幼児期から ALT と一緒に英語に親しむ等）、国際理解教育、訪問先の学校や生徒との交流、将来的な交換留学や交流学习
- ・F-REI、福島イノベーション・コースト構想で設置された研究機関や産業施設（ロボットや水素等のテストフィールドやそこで取り組まれる AI やドローン等を活用した取り組み等）、中野地区に居を構える町内企業等の教育力を活かす教育
- ・プログラミング、アート、スポーツ等、子どもたちの興味関心を引き出し、持続的に取り組む力を養える様々な教育活動（教育課程に収まらない幅広い活動を含む）
- ・ゲーム、漫画、アニメ等の新しい日本文化、茶道、華道、和太鼓等の伝統的な日本文化を学び、世界と交流する取り組み
- ・近隣町村と連携した教育活動（ふるさと創造学や双葉郡教育復興ビジョン推進協議会で取り組むその他の活動、施設の共同利用や合同授業等）
- ・福島大学、東北大学、東京大学等と連携し、大学生による学習の支援や、大学教員の講演会等で広い世界を知ることのできる教育
- ・大震災や原子力災害、エネルギーや食糧問題等と国際紛争、地球環境問題、人口減少や新しい産業の創出等、国際課題や地域課題等を学んだり、背景の異なる地域と意見交換したりできる教育
- ・幼小中の教員や学校に関わる様々な大人が協働して楽しく面白い教育にチャレンジできる教育課程

(2) 地域コミュニティの中心にある学校

まちづくりや地域コミュニティの中心にあり、地域ぐるみで子どもを育て、共に成長できる学校、地域の復興とともにある学校とする。町への帰還者、新たな移住者、避難先においてもふるさとを思う町民、双葉に心を寄せて来てくれる人たちが、この場を通じて、出会い、交流し、未来を語り合い、地域をつくるための場とする。

新しい学校には、図書館、キッチン、創作工房、体育館などがあり、これらの施設は一人でもみんなと一緒に利用できる場所がある。コミュニティを新たに結び直す機会となるよう、既存の枠組みやこれまでの常識にとらわれずに考える。

保育園、幼稚園や学童保育における放課後や休日の活動、公営塾（現在は学習会）、習い事（特に民間のサービスが成立するようになるまで）等についても、地域コミュニティの中心にある学校を目指す。

<具体例>

- ・ 学校が地域の復興のシンボルとなる
- ・ 0歳から100歳（生涯）までが一緒に学び、過ごす
- ・ 地域の教育力が子どもたちの教育に良い効果を生む
- ・ 核家族や親類縁者が近くにいない家庭でも多世代で交流でき、助け合える
- ・ 子育ての不安を地域ぐるみで一緒に活動することで解消する
- ・ 教職員が教育活動に注力できるよう、建物管理や地域開放業務等から解放する
- ・ 外国人の技術者・研究者やその家族と交流する、一緒に活動する
- ・ ICTを活用して言葉の壁を低くし、乗り越える
- ・ 学びが、子どもたちだけでなく町民全員に開かれている、いつでも学校を舞台として様々なチャレンジができる
- ・ 行ってみようと思う場、行くことで新たに人と出会い、コミュニティがうまれる場となる
- ・ 学校を卒業しても、ふるさとを離れても行きたくなる場とする
- ・ 学校に様々な人が来て、学校教育への理解を深める
- ・ 地域の伝統芸能や文化を知ることができ、地域の人々と一緒に取り組む中で習熟し伝承できる
- ・ 高度なICT環境、映像設備、FabLab、大人数に対応できるキッチンや食事スペース、音響の整ったホール等、学校教育にも地域の活動にもどちらにも有効に使える場や設備を備える
- ・ 一人で本に親しむ、大画面で映像を見る、仲間と一緒に勉強会をする、お茶を飲みながら寛ぐなど、図書、メディアやその場所を生かしながら、様々な活動ができる
- ・ 学校の電子図書館システムを地域住民も利用できる
- ・ 動物、放射線や不審者等に心配しないで遊べ、活動できる
- ・ ヘルスケアふたばの代わりにもなるプールがある
- ・ いつも使っている場所、知っている場所だから、災害時に避難しようと思え、避難所として使いこなせる

(3) 大災害の経験を生かした学校づくり

東日本大震災と原子力発電所事故により、双葉町は全町避難を強いられた。様々な災害に備えて町ぐるみ・地域ぐるみで取り組むこと、災害発生メカニズムや危険に対する正しい理解、適切な判断や行動につながる力を身につけられるようにする。

子どもの頃から様々な防災に関する知識を得て、疑似的な体験や訓練によって災害に備える力が身に付く。日常的な備え、避難の意識、避難所（学校は指定避難所になる）での取り組み、旅行者や外国人の避難の課題や支援等を学び、子どもを介して家庭や地域の防災力を高める。

避難所機能を果たすためには、地盤の安全性や建物の堅牢性がまず必要とされる。その上で、学校施設を避難所として使いこなすための計画を検討する。具体的には、一時的な避難者の受入れ、高齢者や小さな子ども、体調不良者や妊産婦等、避難者の多様性に応じて柔軟に対応できる空間、円滑に学校を再開ができる避難スペースと学校専用スペースとの明確なゾーニングなどである。

また、東日本大震災・原子力災害伝承館、双葉町周辺で取り組まれるホープツーリズムや防災関連の企業等のリソースを活用し、学校教育としても、社会教育としても、大災害を経験した町として防災教育や探究的な学びに活かせるようにする。

<具体例>

- ・学校施設は地域の指定避難所となることを想定して計画する
- ・福祉避難所としての指定とは別に、介助や配慮が必要な避難者を一時的にでも受け入れる施設となるため、その対応を図る
- ・日本語を母国語としない町民等と学校が日常的に交流することで、災害発生時に支援できる
- ・自然採光、自然通風、省電力等により、日常的にも災害時にも利用しやすい環境とする
- ・防災備蓄倉庫を整備する
- ・グラウンドは、災害救助への離発着や自衛隊が活動できるようにする
- ・電気や水等をストックしておく
- ・浪江町の水素テストフィールド等の新エネルギー、創エネルギーを活用する
- ・ふるさと創造学や総合的な学びの時間等を活用して、災害・防災をテーマに国内外の他地域とも交流しながら探究的に学ぶ

5 学校づくりの基本方針

(1) 全体方針

現在いわき市にあるふたば幼稚園、双葉南小学校、双葉北小学校、双葉中学校の学び舎を双葉町内に再開できるように施設整備を進める。また、子育ての観点から、保育園や学童保育の施設についても同時に整備を進める。

帰還や移住定住の状況、人口や児童生徒数の想定をもとに、規模に応じて、各機能を集約して整備する。双葉町第三次復興ビジョン、双葉町まち・ひと・しごと人口ビジョン等から、帰還者と移住者を含めた子どもの数は各学年 10 人程度、最大でも 20 人程度が想定される。

公民館、図書館等の生涯学習機能、地域の伝統芸能や文化を伝える博物館機能、町民体育館や町民グラウンド等の社会体育機能等も求められており、学校機能と一体的にあるいは連携できる施設とする。

(2) 施設の整備

1) 認定こども園

保育所機能及び幼稚園機能の整備にあたっては、多様な働き方や暮らし方を支える役割及び、保育と教育の連続性という両面から、幼保連携型認定こども園の整備を目標とする。

2) 義務教育学校

小学校、中学校の整備にあたっては、少人数の問題を克服し、それを活かした新しい時代の学び、双葉町の独自の教育カリキュラム、弾力的な教員や職員配置、施設の共用化等の観点から、義務教育学校を目標とする。

3) 学童保育

現状は避難先でそれぞれが地域や民間の学童保育を利用しているが、震災前に児童館で実施していた学童保育活動の復活を目指す。整備にあたっては、認定こども園の 11 時間保育（保育標準時間）や延長保育、中学校の部活動、総合型地域スポーツクラブとして活動していた双葉ふれあいクラブの再開検討等と合わせて、放課後や休日の子どもや町民の活動や暮らしに対応できるように目標とする。

(3) 各施設の連携により学校と地域が共創する場

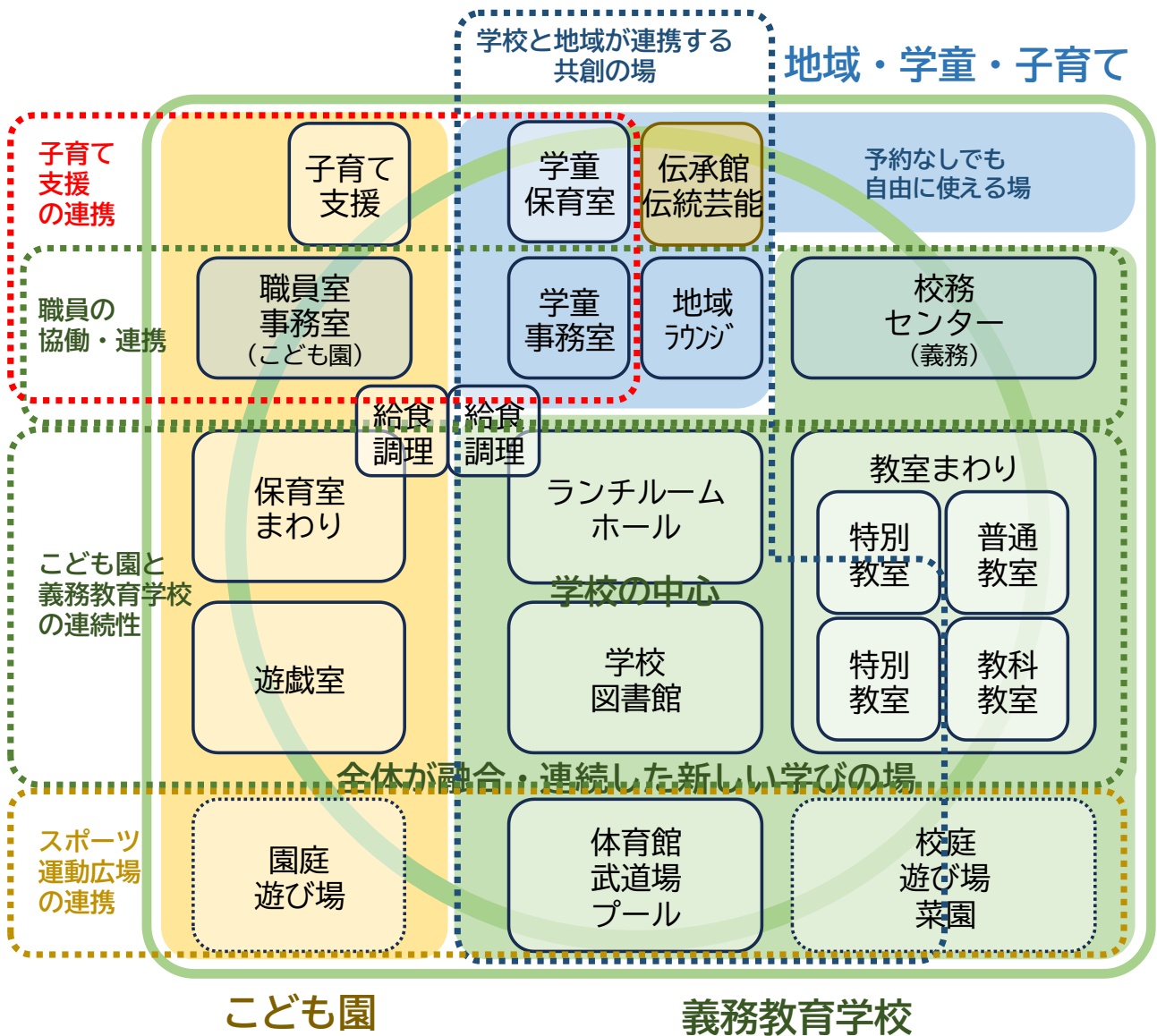
認定こども園、義務教育学校、学童保育施設は、各施設が連携・一体的に利用できる構成を目指す。学校間を超えた一体的・連続的な教育活動、年齢を超えた多様な教育課程や教育プログラム等、様々な取り組みが柔軟に行える構成とする。

また、地域の人々が様々なイベント等に活用し、学校と地域コミュニティの関係づくり、にぎわいや活力の創出、町民みんながチャレンジできる機会づくりやそのための活動の場とすることを目標とする。

以上を実現するために必要な機能を複合し「みんなと一緒に活動できる」施設となるようにする。

(4) 機能構成のイメージ

学校であり、地域みんなの場でもあるような施設構成とする。子ども同士、教職員が協働・連携でき、また施設全体で子どもと大人（地域）がそれぞれに、あるいは一緒に利用できる。こども園の園児と小学校低学年の児童と一緒に遊ぶ、学童保育で体育館や特別教室を使う等、様々な活動に応じて、施設全体を柔軟に、可変的に利用できる構成とする。



図表：機能構成のイメージ

6 計画予定地

(1) 検討の経緯

令和4年度の庁内検討において出された方針に基づき、学校用地として検討されている旧双葉中学校敷地に加え、その他の公共用地から2万㎡程度のまとまりを確保できる5つの候補敷地について検討を行うことになった。その結果、公共用地には旧双葉中学校敷地以外に必要な条件を確保することができないこと、民地を購入する場合は用地の取得費用、地権者との交渉にかかる期間が不明であり、かつ最終的に取得できない可能性があることなどから、旧双葉中学校敷地を第一候補とすることになった。立地として、やや高台にあることによる徒歩などでのアクセス性、造成敷地であることによる地盤等の安全性等が課題として示された。その他の候補敷地についても詳細を確認することとした。

これらの懸念点や課題は、解消に向けて町として継続的に取り組むこととなった。

(2) 学校用地に関する目標の整理

学校用地の検討においては、様々な観点から意見が出され、以下の3点を条件として検討が進められた。

1 災害に強く、中心的な避難所として適切な位置であること

- 津波や内水氾濫の影響がない高台である
- 地震の揺れに強い地盤である
- 災害時に町の全域からアクセスしやすい
- 災害時の拠点となる町役場と連携しやすい

2 町全体からアクセスしやすく、徒歩でも利用できる場所であること

- 駅西・駅東・南の居住エリアから近く、利用しやすい
- 双葉駅・町役場等の公共公益施設と徒歩でも移動できる
- 様々な交通弱者でも利用しやすい場所や機能が整備されている

3 課題・懸念を解決するための方策が検討できること

- 現状の問題点について、行政の施策や周辺環境整備により解決できる場合は、それを前提にデメリットとしないで検討する

(3) 候補敷地

敷地候補として次の5カ所があげられ、比較検討を行った。

双葉中学校敷地	図書館他敷地	町役場他敷地	双葉北小学校敷地	双葉南小学校敷地
用途: ○ 学校 既存建物: ○ 解体申請 敷地面積: ○ 約5万㎡ 安全性: ○ 切土・高台 アクセス: ○ 住宅地の中央 2022年度に学校用地とする方針を庁議にて確認。 既存建物はすべて環境省へ解体申請済み。	用途: △ 未定 既存施設: ○ 解体申請 敷地面積: △ 約2万㎡ 安全性: × 平地・浸水 アクセス: ○ 住宅地の中央 未決定。 既存建物はすべて環境省へ解体申請済み。	用途: △ 未定 既存施設: ○ 解体申請 敷地面積: △ 約2万㎡ 安全性: × 平地・浸水 アクセス: × 中間貯蔵施設近傍 未決定。 既存建物はすべて環境省へ解体申請済み。	用途: × 民間 既存施設: △ 改修 敷地面積: △ 約2万㎡ 安全性: ○ 切土・高台 アクセス: △ 双葉駅近く 2022年度にインキュベーション施設等へ転用し民間に貸し出す方針を庁議にて確認。 既存建物は除染し、改修使用する。	用途: × アーカイブ 既存施設: △ 改修 敷地面積: ○ 約3万㎡ 安全性: △ 切土盛土・高台 アクセス: × 住宅地の南端 2022年度に史跡の保存とセットで震災遺構とする方針を庁議で確認。 既存建物は除染し、改修使用する。

(4) 計画予定地

候補敷地の中から計画予定地とされた旧双葉中学校敷地の立地、敷地概要は以下の通りである。





グラウンド北西の方角で、周囲は高木



グラウンドから校舎を見る



校舎からプールを見る



山林を切り拓いた土地で、もともとあった南小学校を移設して敷地を拡張した上で中学校を建設した。
 四周は山林で、高木によってさざぎられており、森に囲まれた静かな環境である。
 ギャラリー付きの体育館、二層の武道場、50mプール、4面のテニスコート、野球場と200mトラック、100m直送路等、広い敷地に立派な運動施設を有していた。
 敷地に高低差があり、道路高さとする場所が限られている。



校舎からグラウンドを見る



道路側のフェンスは現在すべて植物で覆われている



玄関前からアプローチを見る

図表：旧双葉中学校の概要

(5) 旧双葉中学校校地を学校用地とする課題とその対応

以下の3点を課題とし、今後の整備に取り組む。

課題1 通学路の安全確保

- 夕方以降でも安全に通行できるよう街灯を整備する
- 駅東地区などからでも通学しやすい交通計画を検討する（アンダーパスなど）
- 双葉駅北側の踏切を廃止しないように継続してJRと協議する
- ニーズを把握した上、スクールバスの運行も検討する

課題2 高台への徒歩移動・自転車移動

- 坂道の一定距離ごとに歩道脇に休憩できる平地を設ける等歩きやすい工夫を行う
- 最高到達点より下で敷地内や建物内に入る等の検討を行う
- デマンドバス等により徒歩で来られない人への対策を行う

課題3 敷地北側の地割れ箇所の安全性

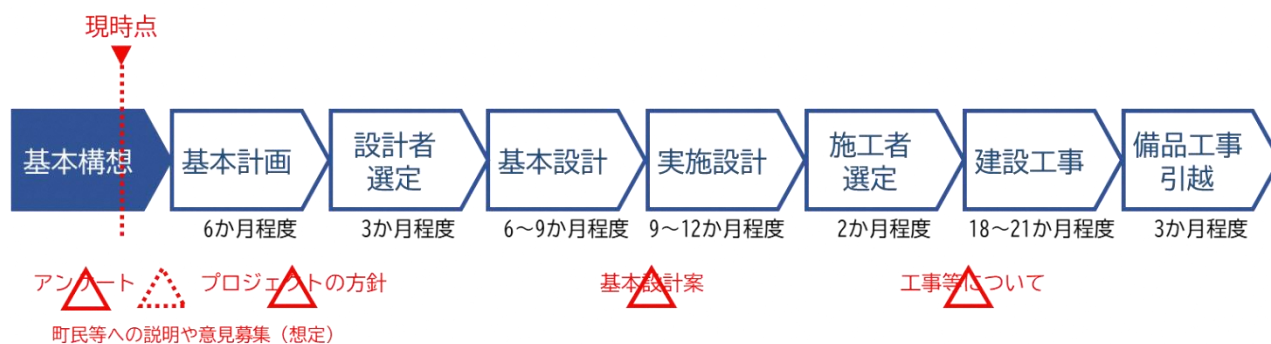
- 特に南側は健全な地盤だと想定されるが、ボーリング調査等を適切に行い、安全性を最大限確認しながら事業を進める

なお、災害時の避難動線については、前面道路の整備は済んでおり、健全な状態が確保されている（南側は開校までの間に路盤、歩道等の整備がされる予定である）。

また、駅西住宅（公営住宅）、特定復興再生拠点区域だけでなく、帰還困難区域も含む全域で帰還意向のある自宅などは避難指示解除がされ、居住が可能となる見込みである（福島復興再生特別措置法の改正）。

7 学校づくりの進め方

早期に双葉町において学校を再開する取り組みのために、各段階において必要な期間を示す。なお、建設事業の方式（事業手法）等により、各段階の必要な期間は前後する。次の基本計画段階において事業手法を検討し、新しい学校の開校時期を定める。



*重ねて実施される場合もあるため、単純に加算されません
*協議や準備のために各段階の間に調整期間が必要な場合があります

8 これからの検討課題

(1) 双葉町ならではの新しい教育課程

新しい学校は、認定こども園と義務教育学校が連続的、一体的となり、年齢、国籍やバックグラウンドが異なる多様な子どもたちが一緒に学び、社会課題に向き合い地域や社会の課題を一緒に考えることを目指す。それらの双葉町が目指す新しい学びや新しい教育課程を具体的に組み立てる。また、学校教育に加え、0歳からの子どもの保育、子どもたちの放課後の活動、社会教育と学校教育の連続性、子育て世代や大人の活動プログラム等も見据え、双葉町の総合的な保育・教育プランをつくる。

今後検討する施設計画の方向性と取り組む活動は密接に関わるため、構想・計画段階から議論を深め、段階に応じて施設計画に反映する。

(2) 地域社会との協働

双葉ふれあいクラブ等の学校とも関わりながら地域で活動していた団体、ふたばプロジェクト等の町役場と連携しながら活動を行う団体、中野地区復興産業拠点等に立地する地元の企業など、保護者や一般向けのアンケートでは把握できていない地域のニーズを把握し、地域と話し合いながら計画に取り組む。また、意見要望を聞くということに留まらず、一緒に取り組み、教育課程や新たな活動を生み出せるようにする。

(3) 地域に向けた情報の発信

双葉町の学校に対する興味や関心があまりない人、避難している人でも、学校づくりについて知ってもらえるように、広報、ホームページや説明会等の様々な手段により、新しい学校が目指すもの、実現したいと考えていることを周知し、理解を促し、ともに活動する仲間を増やす。

(4) 社会課題と向き合う建築・建設事業

公共建築をつくる、特に学校建築をつくることは同時に社会や地域が抱える課題と向き合う場面でもある。国際的な問題から、国全体に関わる問題、地域固有の問題まで、様々な検討課題を整理し、この機会だからできることに取り組む。

双葉町には、以下のような多様な検討課題がある。

- ・原子力に頼らない新たなエネルギーの利用や ZEB 等の省エネルギーの取り組み
- ・雨水利用、雨水流出の抑制、水源地の涵養と治水のための環境整備
- ・子どもたちが生活する場としての木のぬくもりや地域で産する材料としての木材活用
- ・学校給食や高齢者等への配食と食料自給や食育
- ・福島イノベーション・コースト構想等の新しい技術、新しい産業の活用 など

個々の取り組みは直接的な担当課やプロジェクト、取り組む企業等があり、地域全体の取り組みとなるように協働できることを積極的に模索する。

(5) 将来に向けた拡張性・柔軟性

帰還という大きな課題により、子どもの数が読めない段階で整備を進める事業となるため、教室等の増築、計画敷地内への他の種類の建物整備等が行われる可能性があり、拡張性・柔軟性のある計画とする。また、状況に応じて施設の機能を変更・転用できる計画とする。

おわりに：過去・現在・未来の絆を繋いでいく学校に

いわき市にある仮設校舎で学んでいる双葉町の子どもたちに学習支援を行うことになったご縁から、学校設置検討委員会の委員長にお声がけいただきました。

5回にわたる委員会は、町民をはじめとする双葉町や福島に縁の深い委員のみなさんの、双葉町に学校と子どもたちが戻ってくることへの喜び、期待、だからこそ素晴らしい学校にしたいという真摯な思いを、ひしひしと感じる時間でした。各委員からの「未来の双葉町へのメッセージ」にもあるように、これから双葉町に創られる学校は、子どもたちやすべての町民だけでなく、町に関わる多様なひとびとが集い・学ぶ場になること、そして、双葉町の歴史と伝統の復興と未来の発展のシンボルになることが期待されています。委員会での議論のなかで、こうしたビジョンを明確にできたことをとても嬉しく思います。

2023年の8月と12月には、30名近い大学生と仮設校舎を訪問し、児童生徒のみなさんと一緒に学習をし、食事を作り、「夢の学校づくりワークショップ」を実施しました。

夏のワークショップでは、児童生徒のみなさんと大学生がペアを組み、学校を案内してもらいながら、いまの学校でお気に入りの場所、少し苦手な場所について教えてもらいました。冬のワークショップでは、学校にあったらいいなと思う場所について、学年ごとに考え、制作してもらいました。ワークショップから見えてきたことは、大きくふたつあります。ひとつは、児童生徒のみなさんが、いま通っている仮設校舎の学校をとても大切に感じていることです。もうひとつは、児童生徒のみなさんが、ひとりでも、みんなとでも、居心地のいい空間を学校に求めているということです。いま町立学校に通っている児童生徒のみなさんが、新しく完成する学校に通うことは時間的に難しいかもしれませんが、それでも、いまの子どもたちの声や思いが、新しい学校のコンセプトにできる限り反映されることを願っています。

委員会や学習支援の関係で、双葉町を訪問する機会にも恵まれました。学生たちと共に旧双葉中学校の校舎や体育館のなかに入り、13年前のあの日で時間が止まったことを実感する時間をいただきました。最後の委員会のあと、双葉駅から産業交流センターまでひとりで徒歩で往復してみて、過去（あの日のままの建物）と現在（新しく稼働している諸施設）と未来（複数の工事現場）が混在している町のように体感しました。

「文教のまち」として多様な文化や伝統が紡がれていた過去。復興への確かな歩みを進めている町と仮設校舎の学校で子どもたちが学んでいる現在。学校がシンボルとなり、双葉町がさらなる復興と展開を遂げるだろう未来。新しく創られる学校が、双葉町のこうした過去・現在・未来すべてを大切に包含し、絆を繋いでいく場になることを心より願っています。

学校設置検討委員会 委員長
東京大学大学院教育学研究科 准教授
大塚 類

未来の双葉町へのメッセージ

双葉町の新たな学校づくりの議論を通して、様々な方の双葉町への思いや願いに触れてきました。双葉町に固有の歴史を発展的に継承しながら、社会の変化や災害等を乗り越えて在り続ける町をつくるための園や学校の在り方について考えさせられました。日本の保育や教育が大きな転換期を迎えている中、子どもも大人も一人ひとりが主人公となり、希望や願いを持って過去から未来へ自分のストーリーを紡ぎ続けていく、その中で様々な声に耳を傾け、町や社会の現実に向き合っていく…そのような学びが生まれる学校を期待します。町に関わる多様な方々のたくさんの思いや願いが紡がれて、「まちの未来づくり」が一層進むことを願っています。

福島大学人間発達文化学類 准教授 坂本篤史

東日本大震災と福島第一原子力発電所事故から 13 年。ようやく双葉町に学校が戻ってくるための議論が始まりました。多くの課題が山積する中、これから町に戻ってくる学校は希望の光です。学校は町の将来の担い手である子どもたちを育てるだけでなく、コミュニティの中心として多くの人々が集い、対話と協働をとおして未来を創造する場にもなります。土から芽吹いた小さな双葉がやがて多くの小鳥たちが憩い、さえずり、羽ばたいていく大樹となるように、双葉町に戻ってくる学校が、多くの人々に安らぎと豊かな学びを提供し、新たな世界へと雄飛させる場となることを祈念しています。

福島県教育庁教育総務課課長 堀家健一

双葉町で再開する新しい学校には、たくさんの夢が詰まっています。英語を中心にグローバルな学びができる。多種多様な人たちと交流でき、何にでも挑戦できる。幼少期から世界で活躍できるような人材が育つカリキュラムがある。そして、安全で安心な環境がある。

双葉町学校設置検討委員会では、「文教のまち双葉」にふさわしい、未来の双葉町を担う子どもたちを育てる学校をつくるため、たくさんの議論を重ねてきました。

再開した学校に通う子どもたちの笑顔で、町が明るく照らされる日を思い浮かべながら、ぜひ、町のさらなる成長と発展をめざして前進してほしいと思います。

福島県教育庁相双教育事務所所長 武口隆行

震災から13年が経過して、ようやく町の教育の復興がスタートしたことに、心からうれしく思います。どんな学校ができるのか、子どもたちがどう感じるのかそれを考えると、心がわくわくドキドキしています。その想いを子どもたちはもちろん、町民のみなさんも感じられるようにしなければならないと思っています。町立小学校は今年度創立150周年そして、仮設校舎で再開してから10周年を迎えました。その間、町当局をはじめ、ご支援いただいた多くの方々、教職員の努力により学校の歴史と伝統を繋いでくることができました。新しい学校でもそのことをしっかりと受け継ぎ、未来に羽ばたく双葉の子が育っていくことを願っています。がんばれ、ふたばっ子！

双葉町立双葉南小学校・双葉北小学校校長 井戸川浩

文教の町である双葉町。古から人の営みがあった土地。そして人づくりに熱心だった町。これからの新しい双葉町として再生させていくにしても、そうした誇りを基盤に置いた構想を練ることが必要だと思えます。

今はバラバラに見えるかもしれませんが、若手にも熱い思いを持った人が大勢います。何か目標があれば集まれる町民だと確信しており、それによって町の将来が決まってくると思えます。

未来の双葉町を支える子供達を育てる魅力ある学校施設が完成することを願っております。

双葉町社会教育委員の会議議長 江井俊雄

双葉町に新庁舎が完成し、新しい企業も次々と誘致され、住民の方々も少しずつ町に帰還してきている中、学校設置についての検討が始まり、いよいよ、子どもたちの元気な声が聞こえる町になっていくのだなと感じているところです。

震災後、地域コミュニティが失われた町で、この教育施設が子どもたちの学びの場だけではなく、地域住民をつなぐ重要な役割を担う場になってほしいと思えます。

また、この教育施設が双葉町の発展と復興のシンボルになっていくことを心から願っています。

双葉南小学校教諭 津島美里

■総合教育会議委員

	役職	氏名（敬称略）
1	町長	伊 澤 史 朗
2	教育長	館 下 明 夫
3	教育長職務代理者	山 本 眞 理 子
4	教育委員	大久保 敏 己
5	教育委員	高 倉 洋 尚
6	教育委員	高 野 春 美
7	教育委員	小野田 眞 澄

■学校設置検討委員会委員

	役職	構成項目	氏名（敬称略）	選出機関・役職等
1	委員長	学識経験者	大 塚 類	東京大学大学院教育学研究科准教授
2	副委員長	学識経験者	坂 本 篤 史	福島大学人間発達文化学類准教授
3		教育長推薦	堀 家 健 一	福島県教育庁教育総務課課長
4		教育長推薦	武 口 隆 行	福島県教育庁相双教育事務所所長
5		学校長代表	井戸川 浩	双葉南小学校・双葉北小学校校長
6		地域社会関係者	江 井 俊 雄	双葉町社会教育委員の会議議長
7		教育長推薦	津 島 美 里	双葉南小学校教諭

■ワーキンググループ委員

構成項目	氏名（敬称略）	役職
教育部会委員	天 沼 豊 裕	ふたば幼稚園 副園長
教育部会委員	吉 津 望 美	ふたば幼稚園 専門教諭
教育部会委員	星 知 考	双葉北小学校 教頭
教育部会委員	今 泉 好 子	双葉北小学校 教諭
教育部会委員	松 田 直 樹	双葉中学校 教頭
教育部会委員	根 本 崇	双葉中学校 教諭
行政部会委員	堤 愛 子	秘書広報課 主任主査兼係長
行政部会委員	四 家 千 里	総務課 副主査
行政部会委員	守 谷 信 雄	復興推進課 主任主査兼係長
行政部会委員	中 里 俊 勝	住民生活課 課長
行政部会委員	関 滉 世	住民生活課 副主査
行政部会委員	安 部 恭 子	健康福祉課 専門保健師兼係長
行政部会委員	井戸川 雄太郎	健康福祉課 主査
行政部会委員	近 藤 力 壮	建設課 技査
行政部会委員	加 村 めぐみ	生涯学習課 課長補佐兼係長

■事務局

双葉町教育委員会教育総務課

株式会社教育環境研究所（策定支援者）